

## 三変十R&前書き対応 ⑤ 対照表

次の文章は伊藤桂一の小説「潮り鮒」の一節である。主人公の「ぼく」は、軍隊での戦争体験を経て、母、妹と暮らしているのだが、ある日、その妹が発作を起こして倒れた。これを読んで、後の問い(問1〜6)に答えよ。

妹は一応症状が落ちついてから、N大病院へ週に一度通いはじめていて、病状にも的確な診断が得られていた。いつまでつづくかわからない根気づくめの療養の道が残されていたのだが、ともかくためらい勝ちながらも、小康を得つつあった。危地を脱した、という、とりあえずの安堵感が、母やぼく的心情に明るさを与えてくれた。そしてそれは、祈禱師の力が、どのように効果あったかの判断をする余裕をも与えてくれたのである。風山が、しょせんはあやうげな祈禱師でしかなかったことが、霧のうすれて行くようにぼくたちにはわかってきたのだ。しかしもし妹の病状が、より不幸な状態に陥っていたら、母はむろんぼくまで、この世におけるあらゆる、(注1)淫祠邪教でさえ信じたくなつたに違いない。

「(注2)猫のせいにして悪いことをしたね」

と、母は笑ってつぶやいたりしたものだ。それともうひとつふしぎなのは、二度目に風山が来たとき、妹が彼を嫌い恐れるような素振りを示したことである。おそらく風山のもっている祈禱の意味に、本能的な反撥があったのだろう。彼のくれたお守りをつけるのをいやがって「要らない、要らない」と依怙地(えこじ)にいい張った。妹はもう一つ浅草寺のお守りをもっていて、腰のところに、大切に提げていた。ぼくは妹がすべてをそれに託したような形で、腰につけているお守り袋をみると、その度に、いつ死ぬかしない戦線で、兵隊たちが大事にしていた(注3)番(ばん)認識票(にんしきひょう)を思い、(注4)その連想が、へんにぼくを悲しませた。

そのころまた妹は、毎日観音様が見える、といって、母が画用紙を渡すと、色鉛筆でその幻視の絵を何枚も描いた。手にも麻痺(しびれ)が来て文字一つ書けるわけではなかったが、こまかにふるえる筆致で描かれた絵は、巧拙を超えて、ぼくらにふしぎな意味を教えた。母は素朴に感動したが、ぼくはその絵の裏側にあり、一個のいのちの、不安と祈りについて、自身もまた解きたい不安と祈りをもって考えざるを得なかった。母がその絵をぼくに見せたとき、ぼくはその意味を解く手がかりを求めるように、床の上に起き直っている妹をみたが、やはり彼女は放心したようにどこへともなく視線をあずけていただけ。同じ家の中に住んでいて、ぼくは妹に、ふとして珍しいものをでもみるような淡い驚きと違和感を抱くことがしばしばあった。《充分に言葉をもって意志が通じ合わないためでなく、なぜだか妹が、別個な次元にいるような気がしてならなかったのだ。それはぼくにいらだたせしめるような恐れ(おそ)れの情をもたらし、ぼくは妹が、とにかく日々、回復の行程を進みつつあるとは知っていないが、(注5)母にか、よくないことがあるのではないか、ぼくたちの上を悪い星が廻(まわ)っているのではないか、という想いをすてきれなかったのだ。》

妹は自分が、効(かい)もなく倒れたことよって、すべての意味で母に繋がった。二人きりの秘密の部分も秘密でない部分も、すべてが人間の原初の、あの母と子の形に還(かえ)ったのだ。母は生きている関心の一切を娘のためにそそぎつくしているようにみえた。夜更け、ぼくは隣の部屋に起きていて、母と妹との軽い寝息が、静かな調和を醸(か)してつづいているのを聴くと、たぶんそれが人間のもっとも純粋な生(いき)が、いない、淡く澄んだ安堵をかんじたのだ。ぼくは、ぼくが人生で掬(く)み得るものは、このような感慨だ

けかもしれないと思い、そしてそのことにも、いいがたい充足を覚えたのである。

妹の倒れた年は、久慈川はもちろぬ。近郊の河にさえ、ぼくは一度も釣りに行かなかつた。毎日機械のように、家と勤め先を往復する。ぼくにはなんの道楽もなかつた。せめては日曜の午後でも、あまり費用や時間のかわらない近郊へ、出向いて、時期時期の魚を釣ることが、ぼくのたつたひとつの頭を癒める方法であつた。しかし寝ている妹と、付き添っている母の姿を考えると、ぼく自身もまた、できるだけ苦役に従わねばならないような、責任をかんじてくるのだつた。それでも三月、半年と目を教えて行くうちに、妹の症状も落ちついてきた。全快という目標は医師にも定かにわからぬほど遠かつたが、ともかく療養の中での、ささやかな安足を得ていた。《ぼくは帰宅して玄関の扉を明けるとき、大丈夫だろうか？ という一瞬のためらいが、いつも頭を掠めて過ぎるのをかんじた。ひっそりしていると、どこかが痛んで、妹は寝ついていることが多かつたのだ。》

翌る年になって、春の兆しがたちはじめると、ぼくは山でも野でもいい、どこか水の匂いのするところへ出向いて行きなかつた。何となしにだが、ぼく自身のなかにも、降り積もっている憔悴の影をかんじた。確たる理由もない疲れを覚えていた。ぼくは十数年前、アメリカの軍船に乗せられて佐世保港へ、復員してきたのだが、縁の濃い内地の島影をみてもなんの感懐もなかつた。ぼくはただひどい疲れと、未来に対する徒労感だけをかんじ、鬱蒼と繁り合っている樹々に圧迫されるものをかんじた。わずかに家族の支えで、それからの年月を生きてきたようなのだ。何事にも期待することなく、自身が戦争で生きてきたこと、きたことの、死者に対する償いをでもするような気分、自身にとつとめて苛酷に生きてきた。そうして長い灰色の刻のなかに醸されていた、無常観のようなものだけ親しんできたのである。

それでも生きている限りは、「自身のなかへ灌漑できる何か欲しかつたし、できれば活力を与え得る、なにかの事象と接したかつた。しかしぼくは『淡々と水のような生き方を重ねてきただけで、たまに河のほとりに立つときだけ、樹々や草木の華やかな饒舌を楽しんだのである。そしてそれで結構幸福だつたのだ。釣りに、ひとつだけ実益があつた。それは母が、川魚の淡泊な味を好んでいたことで、ぼくはなるべく味のよい魚の棲む河川をもとめては釣りに行つた。釣果は母の膳に供する。これは効なき子の、いわば「注5」養老の釣り」とでも称すべきことであつたかもしれない。それとも或いは、ぼくそのものへの養老であつたかもしれないのだ。なぜならぼくは、ときおり自身をよほどの老齢でもあるように錯覚してしまっていることがあつて、そんなとき、ゆつくり自分をふり返つてみては、まだまだ前くぐみに衰えて歩む歳には、かなりの距離のあることを改めて知るのであつた。そして、ああそつたのか、疲れているんだな、といった妙な安堵をかんじ、この悪い歳月の流れを、どこかで喰いとめねばならないのだ、と、しみじみ思つたことであつた。

四月のある日ぼくは、ほんとに久しぶりに、成田線安食周辺へ、(注6)乗つ込みの鮒を釣りにいった。こころはぼくのよく通つたところで、長門川のほとりを、麦や菜の花を眺めながら、蝶と一緒に堤防を歩いたものだつた。春の、甘い空気に身を浸し、リズムミカルに歩調をとりながら、ぼくはよく「三本ポプラから右へ二間」とくり返したものだ。(注7)利根閘門に近い河岸の、三本ポプラから下流へ二間ほどのところに、この川筋の特筆すべき好釣り場をみつけていたころのことである。

ぼくはその日、ポプラのあるあたりまで出てみようかと思ひながら、駅を出て右へ畑中の小径をたどり、

堤防へ向かってしばらく歩いてきたのだが、途中で、ふと、傍らの細流に白く閃くものをかんじて足をとめた。そこは堤防下の沼へ流れ込んでいる細流が、ひとところ小さな淀みを作っていて、その淀みへ案外水量のある流れが落ち込んでいる。ぼくが足をとめ、その淵に視線を投げたとき、三寸に満たない真鮒が一尾、ヒラリと、みごとな姿勢で、淵から、上の流れへ跳ね込んだのだ。つづいてそれを追うようにまた一尾、水を跳ねて流れに躍りこむと、流れに身をくるめかせて素速く上流へ溯っていった。ぼくの眼を掠めた白いものは、淵から躍りあがる、乗っ込みの鮒の鱗のきらめきであったのだ。

ぼくはしばらくのあいだ、道のほとりにしゃがみ込み、淵から瀬へ溯って行く真鮒にみとれていた。《かれらは素朴な産卵の意志だけに燃えて、淵から海へ、さらに溯って身を横にせねば進めないような田ん圃の中にまで達する。かれらは小さな魚体を、未来になんの疑いも恐れもなく、ただこの駘蕩とした春昼を喜びながら溯って行くのだ。》ぼくの眼の前で、かれらは二尾、三尾と、いじらしい跳躍をつづけて細流を溯ったが、しばらくすると、一群の行動が終わったのか、あとはねむたい陽ざしのなかへ、落ち込む水音だけがきこえていた。

ぼくは、ふたたび堤防へ向いて歩みながら、ごく爽やかな感動を感じていた。ぼくのなかに住みついてきた溯り鮒の意志をかんじた。無心に、純粹に、美しく、ただ純然たる水のなかを溯って行くにすぎない魚の姿勢が、ぼくに何かの啓示を与えながらひらめきつづけた。それはぼくが、持ち得ているように、その実少しも持ち得ていなかった、生きるための活力の尊さを教えた。春の日の道の片ほとりの、なんでもない自然のできごとでしかなかったのに、ぼくはひどく胸のふくらむ想いがして、微風のなかを、いつにない元気な歩調で歩いた。《自身の生きている世界が、どのような暗さに満ちていてもかまわない、自身のひとすじの道だけを、信じ溯って行くことだ。》そうしてたぶんそのときに、ぼくが道で行き迷うときの口ぐせであった、あの童謡のようなもの「ヒラリヒラリと飛たいな」という奇妙な語句が生まれたのではなかったろうか。《人間を支えているものは意外にささやかな生命感だけなのだ、という気が、そのときぼくにしていたのである——》

(注1) 淫祠邪教——人心を惑わすいかなる宗教。

(注2) 猫のせいにして——妹の病気について、かつて母が猫のたたりではないかと語った場面を受けている。

(注3) 認識票——戦死の際に人物が特定できるよう、兵士が身につけた金属製のプレート。

(注4) 復員——兵士が召集を解かれ帰還すること。

(注5) 養老の釣り——「養老の滝」という親孝行の故事をふまえた表現。

(注6) 乗っ込みの鮒——産卵期を前にして深いところから浅いところへ群れてくる鮒。

(注7) 閘門——運河・水路で水量を調節するための水門。